

はじめに

1) 今の私のティーチング・ポートフォリオ

現在、県立広島大学の教員として英語を教えている私が、自分自身の教育改善を図るためにティーチング・ポートフォリオを作成する。読者は「今の私」であり、近い将来、自らを振り返るであろう「未来の私」である。

2) 「お・や・つ」からはじめよう

教員を対象とした研修の講師を務める際に、よく言葉にする私のモットーは「お・や・つ」の力だ。学習者の内的動機付けがなければ学習は成功しないと信じているが、そのために教師にできることは限られている。「おもしろい」「やってみよう」「つづけよう」と思わせることだけである。

私は英語を学び続けたいから英語教師になった。英語を学ぶことは「おもしろい」と思い続けている。同じことを教える対象（学生）に伝えることができればと思う。学ぶことが「おもしろい」英語、それができるようになればもっと楽しくなるだろう。それが「やってみよう」という行動につながる。さらに、よりよい学び方を示せたなら、きっと「つづけよう」と思わせることができる。学習者に抱いて欲しい3つの気持ち、語頭をならべると、「お・や・つ」だ。

「おやつ」は必須ではなく、毎日取らなくても生きていけるし、無理やり食べさせるものでもない。しかし「おやつ」は、必要な栄養を補ったり、心を豊かにしてくれたりする。

ことばの学びには、おやつのように少しゆるやかな、遊び心があってよい、と思っている。

3) 理想の英語教師

私の座右の小型辞書、*Pocket Oxford English Dictionary*、通称PODを初めて見たのは、中学2年生のときであった。担任の英語の先生の研究室で、びっしりと英語の書かれたこの書物に一目で惹かれた。英単語の語義のみならず、語源や文化的なニュアンスをコンパクトに伝えるこの辞書は、かつて「これが引けるようになれば一人前の英語人」と言われたものだ。例えばdogを引けば、種の説明に加えて「人の役に立つ (serviceableness to man)」「猫を毛嫌いする (antipathy to cats)」といった説明がある。吠える動作を表す動詞、鳴き声、雌犬や仔犬の呼び名など、様々な関連語も記してある。連想の糸を辿りながら語感を膨らませてくれる。もう一つ例を挙げてみよう。Decemberを引くと、「クリスマスと結びついた月の名 (a month associated with Christmas)」とあり、SeptemberからDecemberまでのラテン語の語源 (*septem 7, octo 8, novem 9, decem 10*) や、ローマの旧暦はMarchに始まるといったことが記されている。特殊な記号や省略が多いため、使いこなすのは容易ではない。私自身、十分引きこなせているかどうか自信はないが、常にそばにある。私が英語教師になったのは、この辞書と出会うきっかけとなった恩師の影響が大きい。このポケット辞書のことや、そのおもとである世界最大の英語辞書 *Oxford English Dictionary*、語源や文法の歴史など、授業やホームルームの雑談の中で、言葉の面白さを聞かせてもらった。夏休み・冬休みの宿題は膨大で（夏は教科書巻末の単語リスト500語を、毎日1回ずつノートに書いて提出するというもの。結局、500語を40回ずつ書き、ノートは6~7冊にもなった。冬は教科書1冊をまるまる書き写し、すべて訳した。）、本文の暗唱がたびたび課されたのには参ったが、これが私の基礎を築いてくれた。自称「グラマーボーイ」の恩師の説明を聞くと、英文の仕組みがスッキリと分かる。ことばの勉強は面白いなあ、と思い、いつしか私も英語教師を目指していた。

英語教師に求められる力はいろいろある。語彙や文法の知識だけでなく、運用能力も必要だ。それに加え、ことばの面白さを伝える力も不可欠ではないか。「おやつ」を感じさせてくれた恩師のように。

1 責任 (What I should do)

1) 県立広島大学における英語教育

大学における英語教育の目的は何か。学習指導要領に基づく高等学校までの課程を終えた学習者に、どこまでの力をつけていけばよいのか。これは大学の掲げる人材育成目標と密接な関係をもつ。ここでは、私の勤務する県立広島大学における英語教育について考えてみたい。

まず、本学の人材育成目標は次の通りである。(添付資料1)

県立広島大学は、主体的に考え、課題解決に向けて行動できる実践力と豊かなコミュニケーション能力を備え、幅広い教養と高度な専門性に基づいて、高い志とたゆまぬ向上心をもって地域や国際社会で活躍できる人材を育成します。

この人材育成目標に沿って「学士課程全体」のディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーが策定されているが、その中で全学共通教育の外国語科目に与えられた使命(守備範囲)を記したものが、「全学共通教育科目カリキュラム・ポリシー」に掲げた次の目標である。(添付資料2)

ここでは、実用(語学力)と教養(異文化理解)を両輪と捉えている。

<全学共通教育の教育目的>

大学生としての「学びの基礎・基盤」を固め、専門教育と並び立つ「豊かな教養」を身につけます。

<基盤「外国語科目」の学修目標>

ア 異文化への関心と理解を深めます。

イ 国際化にともないますます重要視される外国語能力の基礎を育成します。

このカリキュラムポリシーのもとで設定された「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」を私は担当している。

授業の具体的な内容の前に、一点書き加えておきたいのは、本学は現在、教育改革の最中にあり、その一環として文部科学省補助金「大学教育再生加速プログラム(AP)」のテーマⅠ(アクティブ・ラーニング)に選定され、平成26年度後期より取り組みを続けている。(添付資料3)

<大学教育再生加速プログラム(AP)選定取組のねらい>

地域活動を組み込み、主として教室外で行う「行動型学修」と、学修者の知的能動性を揺り動かし深い学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせた「能動的学修」を学士課程教育に計画的に導入して教育改革を進める全学的な取組である。これにより、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたり学び続ける自律的な学修者アクティブ・ラーナーの育成を目指す。

平成27年度より事業責任者を務めている私の授業の中にも、このAPの狙いを極力盛り込んでいる。特に教室内における「参加型学修」の機会をできるだけ多く設けるようにしている。

2) 私の担当科目

県立広島大学の開学以来、次の授業科目を担当している。(添付資料4)

<p>英文講読Ⅰ (旧カリ：H17年度～H26年度) 英語Ⅰ (新カリキュラム：H27年度～) 学部1年前期必修 履修者1クラス20～30名</p>	<p>英文講読Ⅱ (旧カリ：H17年度～H26年度) 英語Ⅱ (新カリキュラム：H27年度～) 学部1年後期必修 履修者1クラス20～30名</p>
<p>目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・語彙力、文法力を高め、さまざまな分野の英文を正確に理解できる。 ・文章の社会的・文化的・歴史的背景を読み取り、異なる文化に対する知識を深めることができる。 ・自分の意見を平易な英語を用いて表現できる。 <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな分野の英文に触れることにより、語彙および語法や文法などに関する知識の積み上げを行う。 ・リーディングに必要なスキルを用いて文章の概要や要点を正確に読み取る読解演習を行う。 ・読んだ内容に基づいて意見をまとめ、グループで英語によるディスカッションを行うなど、「書く」「話す」「聞く」技能とも関連付け、読みの深化を図る。 	<p>目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・語彙力・文法力を駆使し、英文の多読・速読ができる。 ・書き手の意図を的確に捉えることができる。 ・英文読解を通して、文化や社会問題等についての理解を深めることができる。 ・自分の意見を英語で的確に表現することができる。 <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文章の構成やキーワードを把握するなどのリーディングに必要なスキルに触れながら多量の英文を読む。 ・英英辞典の引き方、パラグラフの構成、関連した背景的知識等に関する説明を行う。 ・読んだ内容について意見をまとめ、グループで英語によるディスカッションやプレゼンテーションを行うなど、「聞く」「話す」「書く」技能とも関連付け、読みの深化を図る。
<p>上級英文読解 (旧カリ：H18年度～H27年度) 英語Ⅲ (新カリキュラム：H28年度～) 学部2年前期必修 履修者1クラス20～30名</p>	<p>専門英語講読 (旧カリ：H18年度～H27年度) 英語Ⅳ (新カリキュラム：H28年度～) 学部2年後期必修 履修者1クラス20～30名</p>
<p>目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英文を正確に読み取ることができ、さらにcritical readingやpresentationなどの応用的な読みへとつなげることができる。 ・自分の意見を英語で表現し、相手に効果的に伝えることができる。 <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リーディングに必要なスキルを駆使し、速読や多読を行う。 ・読解によって得た情報をもとに意見をまとめ、効果的な発信へとつなげる活動を行う。 	<p>目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専門分野に関連した学術的な英文を読んで理解できる。 ・大学生として必要なアカデミック・リーディングを中心とした言語能力(表現力を含む)を身につける。 <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命や環境に関する内容の教材を扱い、基本的な専門用語や表現を含めた読解演習を行う。 ・グループでのディスカッションやプレゼンテーションを取り入れ、読みの深化を図る。 ・自分の意見をエッセイにまとめ、発表する。

2 理念 (Why I am doing)

上で見た「責任」を果たすため、与えられた科目の授業に力を注いでいるが、その授業を支える「私の理念」について、考えを整理しておきたい。

1) どんな分野でも必要とされる英語がある

平成 14 年、前任校である比治山大学（学校法人比治山大学学園・広島市）から、当時の広島県立大学（庄原市）へ着任した。前任校では、平成元年に LL 教室の助手として着任して以来、13 年間勤務した。助手時代は視聴覚機器や教材を用いた授業の補助、自習室での学修支援を担当した。2 年目から一般英語の授業を担当したが、常に視聴覚機器や教材を駆使した授業展開を心がけてきた。

平成 6 年に四年制大学となり、英語を専門とする学科がスタートした。当時は英語教育にコンピュータが導入され始めた頃であり、私は専門科目の一つとして「LL・CAI 演習」という授業を担当した。LL (Language Laboratory) と CAI (Computer Assisted Instruction) を組み合わせたものだ。インターネットが急速に普及した頃でもあり、私は、頭の中の連想とウェブ上のハイパーテキストとの類似性に惹かれた。学習者の語連想をウェブ上のリンクで表した「私のメンタルレキシコン (mental lexicon: 心的辞書)」というサイトをスタートさせたのもその頃だ。このほか、英語運用力を高める科目や時事英語を扱う科目などの専門科目、教員養成に関わる科目を担当し、卒業論文を指導する 3, 4 年生のゼミも担当した。

様々な授業科目を通じて授業の経験を重ねる傍ら、平成 10 年から私自身が博士課程後期で学ぶ機会を与えられた。学位取得後は修士課程の授業も担当することとなった。

県立大学への転出が決まった頃、専門も卒論も持っているのに「どうして一般教養の教員になるのか？」と問われたことがある。そのとき私は「**どんな分野でも必要とされる英語がある。その英語を教えるのが私の仕事だ。**」と答えたように思う。県立大学への着任当初は経営学部、旧三大学統合後は生命環境学部属しているが、常に一般教養（全学共通教育）の英語必修科目を担当してきた。英語を専門とする学生が対象であれば、どんなに苦手であっても、ある程度強引な指導法で構わない、と（前任校では）思っていた。しかし、他の専門を求めて入学してくる学生に教えることとなり、英語に対する苦手意識や習熟度のばらつきに対応する必要性を痛感するようになった。新しい環境は、英語教育の専門家として「血が騒ぐ」、また「腕が鳴る」、そんな思いがした。それまで以上に、学習者中心 (Student-Centered) の授業を志向し、「大福帳」(毎授業のコメントを学生と教員がやりとりするシート) を始めることにした。「大福帳」は現在、「コメントシート」と名を変え、今も続けている。(添付資料 5)

英語以外の専門を持つ学生にふさわしい教材はどのようなものか、常に気を配っている。学生にとって馴染みの内容であれば、英文の理解も促進される。背景知識 (Background Knowledge) がものを言うからだ。生命環境学部の授業では、科学分野の素材を選ぶことも多く、教師である私自身の背景知識向上にも役立っている。

2) 楽しいから身につくのか、身につくから楽しいのか

英語力のうち、TOEIC 等の外部試験のスコアで測れる力を向上させる方法はいろいろあるが、ただ黙々と一人で机に向かって問題を解く、という方法を取る場合もあるだろう。これでスコアアップに結びつくこともあるが、「教室という場」を活かしきれているとは言い難い。複数の学生と教員が同じ場を共有する教室では、授業そのものがコミュニケーションであり、ゴールもまた、コミュニケーション能力であるべきであろう。とは言え、必ずしも「英会話」というわけではない。読み、書き、

聞き、話す。意思疎通を図るための 4 技能の向上を目指すコミュニケーション中心教授法 (Communicative Approach) を基本にしたい。

英語の学習を楽しくする方法はいろいろ考えられるが、私が常に意識しているのは、「楽しいだけで身につかない」、「英語力がつくけど楽しくない」といった授業にはしたくない、ということだ。ゲーム的な要素を取り入れ、活動中心に行うことで、「楽しさ」を演出する。しかしそこに必ず学んで欲しい中身をしっかりと盛り込むことだ。

私は幼少期より、ことばのリズムやことばあそび (ダジャレなど) に興味を持っていたと思う。これらの面白さは「ことばの創造性」に起因し、「literature with a small l' (小文字で始める文学)」と呼ばれることもある。大文字で始める文学 (Literature) が大作家による文学作品を表すことにに対し、小文字の文学 (literature) は歌や詩にみられる韻や比喩のほか、語呂合わせなどの言葉遊びが含まれる。ことばの教師として、こうした面白さの中に言語の本質を見る思いがする。これらを授業の中に取り入れることで、楽しさの中にも「ことばへの気づき」を与えられるのではないか。語の連想ゲームを英英辞典の定義に近づけていくゲームや、語呂合わせで英単語を覚えるキーワード法を取り入れると、ことばそのものに由来する「楽しさ」を感じることができる。(添付資料 10)

こうした面白さに加え、学ぶことを楽しいと感じるために「達成感」は不可欠である。私は近年、インストラクショナル・デザイン (Instructional Design) に関心を持つようになった。「できなかったことができるようになるために、どういう活動をどういう順序で行うか」という点に配慮し、できるだけ細分化された単位で達成感を与え、次のステップに進むデザインをこころがけている。ある意味「計算された達成感」を味わわせる授業設計である。後で述べる DTR や Moodle は、学習法や教材開発において、その基本に通じる。

大学で学ぶ英語の究極の目的に、アカデミックスキルとしての英語がある。県立広島大学では、平成 27 年に新しいカリキュラムで共通教育の英語をスタートさせたが、私の所属する庄原キャンパスの必修英語では、その前年から試行錯誤し、学術的言語技能 (Academic Language Skills) を目指した授業を展開している。具体的には、批判的な読み、ディスカッション、エッセイ、プレゼンテーションなどを実施しているが、そのための教材選定にも留意している。具体的な内容は後述する。

3) 私の教育理念 : Back to Basics

以上、今の私の教育理念を整理すると、次のようになる。

- ・背景知識を活用した教育 (Background Knowledge)
- ・学術的言語技能への展開 (Academic Language Skills)
- ・学習者中心であること (Student-Centered)
- ・インストラクショナル・デザインの採用 (Instructional Design)
- ・コミュニケーション中心であること (Communicative Approach)

これらの英語の表記を頭字語 (acronym) にすると、BASIC となる。上でことば遊びについて触れたが、これは単に面白いからというだけでなく、読み手に印象深く伝えることのできる戦略の一つと考えている。

ここで述べた BASIC の前提として、基本的英語力 (basic English proficiency) にも言及しておきたい。こちらの basic には、発音、語彙、文法、談話の力という英語運用の基礎が含まれる。これらは、大学で英語を学ぶ前から常に継続して身につけておくべき力であると言えよう。

BASIC と basic、これらは相互に関連しながら、私の授業で具体化されている。

3 方法 (How I am doing)

1) 理念の具体化について

ここまで述べてきた私の理念をどう具体化していくか。上で述べた理念ごとにまとめてみたい。

(1) 背景知識 (Background Knowledge)

・背景知識を利用した読解・聴解が可能となるよう、学生の専門分野（生命・環境）に近い科学の話題や最新のニュースを取り入れた教材選定を行う。平成 28 年度は、国内外のニュース記事から、1 年生は、農作物を脅かす病気、オバマ米大統領の広島訪問、イギリスの EU 離脱問題に関する記事を取り上げ、2 年生は、食事の際の音と食欲、動物園でのゴリラ射殺、18 歳選挙権に関する記事とともに、食、地球温暖化、感染症などの短めのパッセージも扱った。

平成 29 年度は、1 年生ではスポーツにチャレンジする若者や調査捕鯨、2 年生では GPS 衛星、憲法改正や禁煙法案、効果的な睡眠などを扱っている。(添付資料 6)

(2) 学術的言語技能 (Academic Language Skills)

・批判的思考、ディスカッション、エッセイ、プレゼンテーションの力を、自分の意見を組み立て、英語で表現する練習を通じて高める。そのために、上記の読み物教材の選定時に、できるだけ意見の分かれる問題を取り上げ、授業中にグループディスカッションを行ったり、Moodle のフォーラムに意見を書かせたりするよう心掛けている。このほか、毎回の課題として Reading Log (図書館の英文図書を読んで意見をまとめる読書記録) をパラグラフの基本構造に沿って書かせ、それに基づく Book Talk (グループでのプレゼンテーション) を行っている。(添付資料 7)

(3) 学習者中心 (Student-Centered)

・「おもしろい」「やってみよう」「つづけよう」と思わせる授業の雰囲気づくり (カードゲームによるウォームアップや、グループで行う様々な活動) を工夫する。主体的な学習姿勢を引き出すために、Moodle 上のフォーラムを SNS のように用いて学生同士が教え合う環境を整えるとともに、コメントシートでニーズを的確に掴むよう努めている。

(4) インストラクショナル・デザイン (Instructional Design)

・DTR や Moodle を用いたトレーニングなどにおいて、スモールステップの学習設計を行い、達成感を味わわせる。(添付資料 8)

DTR とは、次のような学習法である。幕末明治期に日本で英語が学び始められた頃より、漢文と同様、行きつ戻りつして「訳読」する方法を示した独習書(「独案内」と呼ばれ、発音や語義のほか、訳順をあらかじめ示した返り点のような数字が記載されている、言わば「虎の巻」)が多数出版され、教室では「書取」と呼ばれたディクテーションや、「復文」という和文英訳法など、様々な学習法が存在した。Dictation (書取), Translation (訳読), Re-translation (復文) の3つの学習プロセスを有機的に組み合わせ、1枚のワークシートで学習可能にしたものが「DTR 学習法」である。一度に扱う短いパッセージをもとに、「書取」「訳読」「復文」に前後して、暗唱、シャドーイング、音読の速読、スライドによる英和・和英学習を行うなど、4技能をフルに使った学習を繰り返す。シートの完成を目指す。「書取」では難しかった英文が、様々なステップを経て、最後にはスラスラと「復文」できるようになる学習に、達成感を味わう学生も多い。この学習法に対しては、コメントシートや授業アンケートの自由記述において、しばしば学生からの好意的な評価が見

られる。(添付資料9)

音声とテキスト（文字）が揃っている素材であれば、何でも DTR 学習法に利用可能であるが、短い文章であってもかなりの時間を必要とする。Moodle の利用により、授業と授業外学修課題との組み合わせを工夫するように心がけている。

(5) コミュニケーション中心教授法 (Communicative Approach)

・授業そのものをコミュニケーションの場とし、4 技能を駆使する様々な活動を通して意思疎通の力を養う。(2) の項で述べた Reading Log (読書記録) を用いた活動では、まず予習として英文図書を「読み」、その感想を「書き」、授業ではそれに基づいて Book Talk を行って「話し」、同じグループの Book Talk を「聞く」。さらに内容に関する質疑応答や意見交換を行うなど、4 技能すべてを用いて双方向性をもった活動を行っている。

2) 具体化を支えるもの

これまでに述べた 5 つの理念の具体化には、基本的英語力 (basic English proficiency) が不可欠である。発音、語彙、文法、談話の力を高めるため、スライドを用いた丁寧な説明と、DTR や Moodle を用いたトレーニングを重視している。

Moodle とは、e ラーニングのプラットフォームの一つであるが、私は空所補充や並べ替えなど、自動採点のできる英文法ドリルに活用している。基本的英語力を身につけるには、やはり反復練習が重要である。自動採点結果に一喜一憂するのではなく、何度もやって最終的に満点が取れるだけの反復練習を推奨している。

基本的英語力は、学習内容を十分に理解していく過程の中で身に付くものと思われる。その方法の一つとして、私は Moodle のフォーラム機能を利用している。これはインターネット上の掲示板のようなもので、学生間の意見交換に用いることができる。

平成 27 年度からの取組として、教材として用いる記事の読解テスト問題 (予想問題) を学生に作成させ、他者の作成した問題に答えさせる形で、履修者相互の学び合いを促進している。テスト問題 (および模範解答) を作成するには、英文を十分理解しておく必要がある。解答者よりもむしろ、出題者のほうにより深い理解が求められる。英文を吟味し、辞書の助けを借りながら十分に理解した上で問題を作成する。その設問に答える学生とのやりとりを通じ、学びがさらに深まる。基本的英語力の養成には、こうした「ネット上の参加型学修」も効果的であると思われる。

4 成果 (What I have done)

1) アンケートから見た理念と方法の成果

これまで述べてきたような理念にもとづき、それを指導方法という形で具現化するよう努めてきた。そうした授業の結果、私は県立広島大学の人材育成目標の達成に貢献しているのだろうか。

ここでは私が掲げた理念と指導方法、大学の人材育成目標との関連を示すとともに、その成果を授業アンケート結果から探ってみたい。

理念	方法	人材育成目標&カリキュラムポリシー	成果を知るエビデンス (授業アンケート)
1) 基本的英語力	発音・語彙・文法・談話の力 (DTR, Moodle)	・外国語能力の基礎	e) 知識・技能向上
2) 背景知識	専門分野や最新のニュースに配慮した教材の選定	・幅広い教養 ・専門教育と並び立つ「豊かな教養」 ・異文化への関心と理解	c) 課題明示 f) 教材・教具
3) 学術的言語技能	批判的思考, ディスカッション, エッセイ, プレゼンテーション	・課題解決に向けて行動できる実践力 ・地域や国際社会で活躍	c) 課題明示
4) 学習者中心	コメントシート 教室の雰囲気作り 主体的 Q&A	・主体的に考える ・高い志とたゆまぬ向上心	a) 学修姿勢 b) 授業外学修 g) 発展的動機付け h) 学修支援
5) インストラクショナル・デザイン	DTR eラーニング	・大学生としての「学びの基礎・基盤」	f) 教材・教具
6) コミュニケーション中心教授法	4 技能の活用	・豊かなコミュニケーション能力	d) 能動的学修

上の表では、理念に基づく方法によって養われると思われる力（人材育成目標&カリキュラムポリシー）を示し、その成果を知る上で参考となる授業評価アンケートの項目を挙げた。

2) 学習者中心の課題

次の表に平成 27 年度後期～平成 29 年度前期の授業アンケート結果を示す。数値は 4 段階評価のうち、3「そう思う」もしくは 4「強くそう思う」の肯定的評価の合計比率である。以下の数値は、上の理念にもとづく方法が学生にどの程度受け入れられ、その成果がどの程度自覚されたかを示す目安と言えるであろう。

	理念・方法	H27 後期 英語Ⅱ (92名) 専門英語講読 (74名)	H28 前期 英語Ⅰ (109名) 英語Ⅲ (73名)	H28 後期 英語Ⅱ (104名) 英語Ⅲ (67名)	H29 前期 英語Ⅰ (22名) 英語Ⅲ (69名)
a) 学生：真剣な取組	4)	92% 93%	95% 99%	95% 94%	91% 100%
b) 学生：授業外学修時間	4)	65% 64%	63% 74%	64% 78%	55% 62%
c) 授業：課題の明示	2), 3)	98% 96%	99% 97%	100% 99%	100% 97%
d) 授業：能動的学修機会	6)	99% 96%	99% 99%	99% 99%	100% 99%

e) 授業：力が身につく	1)	95% 97%	93% 92%	94% 91%	95% 96%
f) 授業：教材・教具の適切さ	2), 5)	99% 96%	94% 96%	94% 96%	100% 94%
g) 授業：さらに学びたくなる	4)	87% 96%	92% 92%	90% 93%	91% 93%
h) 授業：必要な支援を得た	4)	95% 95%	92% 97%	97% 94%	95% 99%
i) 授業：総合的満足度		90% 93%	89% 93%	92% 87%	91% 96%

多くの項目で肯定的な評価が90%を超えているが、b)の「授業外学修」は当該期間中55～78%にとどまっている。g)の「さらに学びたくなる」、i)の「総合的満足度」において、一部90%を下回っている学期がある。(いずれも網掛け部分)

以下では「学習者中心」という理念に分類した項目（「授業外学修」を含む）について、理念の実現という観点から、それぞれが示す実態を解釈してみたい。

- a) 学生は概ね真剣に取り組んでいる。「やってみよう」という気持ちになっているのであろう。
- b) 学生の授業外学修については、十分な結果とは言えない。彼らは「つづけよう」という気持ちになっていない様子が伺える。
- g) さらに学びたいという学生が90%を超えることから、概ね「おもしろい」という動機付けはできているものと思われる。
- h) 授業では概ね必要な支援を得たと答えている。コメントシートによるニーズ把握のほか、メールや対面での学修相談に応じることもあり、それらが機能していると考えることができよう。

以上のことから、私の授業は概ね好意的に捉えられている項目が多いが、理念として掲げる一つである「学習者中心」については、特に授業外における持続的な学習を促す動機付けに十分至っていないという結果であった。

5 目標 (What I will do)

1) 短期的課題

上で課題が明らかになったように、自律的な学修をより一層促すことが重要と考える。私自身は英語を「おもしろい」と思い、「やってみよう」「つづけよう」と感じて続けてきた。授業を工夫するのも楽しい。そうした私の「お・や・つ」が、自然に学生に伝わるのが理想であるが、実行に移すことは簡単ではない。むしろ目標をより一層明示し、「できなかったことができるようになるには、十分な授業外学修が必要である」ことを繰り返し伝え、学生の動機づけに結びつけていきたい。

私の短期的な目標として、平成28年度前期時点において、「授業時間外学修に関して回答する学生の肯定的評価（3もしくは4）の比率を向上させ、平成28年度末のアンケート調査では8割を超えること」としていた。これは2年生については近い数値に達したが、1年生は横ばいで、翌学期（平

成 29 年度前期) にはいずれも数値が下降した。これは根本的な解決策が必要という証であろう。数値目標を掲げる以前の問題として、上で述べた「目標の明示と必要な学修時間の提示」が不十分であったことを自覚している。そこで今回の短期目標の一つは、「**シラバスを充実させ、目標と、それに必要とされる学修時間を明示する**」こととしたい。

さらに、ティーチング・ポートフォリオ (TP) の更新後、できるだけ早期に「**アカデミックポートフォリオ (AP) を書く**」ことを目標としたい。TP を通じて、私は自分が英語教師として「お・や・つ」を持ち続け、学生に「お・や・つ」を感じてほしいという思いを一層強くした。この思いを所属組織の中で実現させるために、さらに広い視野から自らの省察が必要であることを感じている。また、ここではあまり触れていないが、私には学内で果たすべき大きなミッションがある。全学的な教育改革である。これを前に進めるには、全学に TP を浸透させることが重要であると感じる。より説得力を持ってその旗を振るためにも、私は TP の先にある「AP を書く」目標を早期に達成したい。

2) 長期的課題：平和をゴールに

長期的な目標は、学生からの「なぜ英語を学ぶのか」という問いに対し、英語教師として明解に答えられるようになりたいということである。

英語によるコミュニケーションにせよ、異文化理解にせよ、そこで問われるのは「他者を理解する」ということだ。言葉や文化は異なっても、相手の側に立って理解しようとすることは尊い。これが相手を「おもいやる」ということだろう。この思い遣りの蓄積が国境を、異文化を、世界中の様々な障壁を超えたとき、世界に平和が訪れるのではないだろうか。

「英語を学ぶと、世界中が平和になるんだ」

こういうことを、真剣に語れる教師に、私はなりたい。

おわりに

昨年度のティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ、そして今年度の更新ワークショップは、いずれも非常に楽しく、そして苦しい時間でした。これまでの自分を振り返り、様々な経験を思い出しながら語る時間はとてもありがたく、楽しいものでした。一方で、そうした振り返りをまとめて文章にするのは、プレッシャーともどかしさを同時に感じる、まさに「苦行」に匹敵する作業であったと思います。しかし、参加して本当によかった、正解でした。TP の作成・更新を通じ、私は自分が英語教師であること、ことばが好きなことばの教師であることを思い出しました。原点に帰ることで、私自身の「お・や・つ」に再会できたようです。そしてそこから、新たな目標も生まれました。

皆様、とりわけメンターとスーパーバイザーの方々に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

(2017 年 9 月 21 日 TP 更新ワークショップにおいて更新)

(2016 年 8 月 24 日～26 日 TP 作成ワークショップにおいて作成)